

ねらい 決算整理事項の必要性を理解する。有価証券の決算整理事項を学習する。

ここからは、決算整理事項という項目を学習します。決算整理事項というのは、決算の時に整理しなければいけない仕訳（事項）なのです。

決算整理事項にも様々な種類がありますが、まずは有価証券で考えてみましょう。

例えば 100,000 円で購入した株式が決算時に 150,000 円の価値になっていたとしましょう。もしその株を売却していれば、50,000 円現金が増えていたことになります。株式を売却していれば、50,000 円利益が上がるのに、株式を売却しない場合は、100,000 円分の価値になるので、どんな人でも決算時に株式を売却するでしょう。そこで株式を売却しなくても、不公平感がないように、売却していなくても決算時に、50,000 円分株式の価値を計上しようという考え方をするので。逆に、100,000 円の株式が決算時の株価が 50,000 円だったとしましょう。この時も、いくら売却していないからといって、100,000 円の価値のままではダメなのです。決算時には 50,000 円分の価値に修正しなければなりません。

このように、決算時に価格（価値）を見直したりすることを決算整理事項といいます。有価証券の決算整理事項は、有価証券の評価替えと呼んでいます。

ここでいう株式の価値は市場（証券取引所など）の相場を指します。この証券の価格を時価といいます。また、帳簿上の価格を簿価といいます。決算整理事項では簿価よりも時価の方が高くても、低くても、簿価を時価に合わせる処理をします。これを「時価法」による評価といいます。時価法によって、簿価を修正する場合、簿価よりも時価のほうが低い場合には「有価証券評価損勘定」によって処理をし、時価の方が高い場合には、「有価証券評価益勘定」を使って処理します。

例 1 取得原価が 100,000 円で決算時の時価が 80,000 円の場合、有価証券を評価替えをすれば

（借方）有価証券評価損 20,000 （貸方） 有価証券 20,000

例 2 取得原価が 100,000 円で決算時の時価が 120,000 円の場合、有価証券を評価替えをすれば

（借方） 有価証券 20,000 （貸方） 有価証券評価益 20,000

また複数の売買目的の株式を持っている場合には、各株式をそれぞれ評価してその合計金額で評価益か評価損を計算します。（右図参照）

有価証券の評価替え

有価証券の評価替えは「売買目的」で購入した有価証券が対象である。



時価上昇

有価証券評価益



時価下降

有価証券評価損

時価に合わせた評価を行う

複数の有価証券の評価替

複数の株式を持っている場合は、それぞれを評価してその合計で評価益または評価損を算出します。下記の場合は 2 種類の株式ですが、3 種類株式を持っているなら、当然 3 種類分評価をして、その後合計を計算します。決算整理後は、株式 A の簿価は 50,000 円、株式 B の簿価は 270,000 円になりますので、有価証券勘定は 320,000 円となります。

複数の有価証券がある場合（売買目的の場合）

	簿価	期末時価	評価損益
株式 A	100,000	50,000	-50,000
株式 B	200,000	270,000	70,000
合計	300,000	320,000	20,000

例 3 上記株式を評価替えをすると

（借方） 有価証券 20,000 （貸方） 有価証券評価益 20,000

注意 簿記では似たような勘定科目がありますが意味がまったく異なります。本科講座 11 で有価証券の仕訳を学習しましたが、有価証券を売却した場合、そこでの勘定科目は有価証券売却益でした。ここで学習している有価証券評価益と間違えないようにしましょう。